

古典日記

竹西寛子

中央公論社

古典日記

竹西寛子

古典日記

昭和五十年六月二十日 初版印刷
昭和五十年六月三十日 初版発行
著者 竹西寛子 発行者 高梨茂
発行所 中央公論社 東京都中央
区京橋二一一 電話代表東京五六
一―五九二一 振替東京二―三四
印刷 三陽社 製本 協和製本

古典日記
目次

中空の思想 7

紀貫之のこと 37

物の心・事
の心 53

大空の月 67

憂しや世の中 79

事物としての情
103

女房というもの
117

空白の発言
147

心の鬼
169

あとがき
207

装帧 熊谷博人

古典日記

中空の思想

人は行き霧は籬に立ちどまりさも中空にながめつるかな／見
ると思うとの調和／精神的アウトサイダー／王朝文学の思想

生まれてはじめての連載に、私は「往還の記」という題をつけた。企てと結果との隔りに目をつむって言うなら、作者としては、ひそかに、現代と古典の往還、小説と評論の往還の意もこめて、短くないエッセイを書きつくつもりであった。今日は、過しにくい梅雨の晴れ間に一時の風を恵まれているが、考えてみると、あの連載の一回目から、ちょうど九年が過ぎている。同じ夏の盛りに向って「古典日記」を書きはじめるのも、何か不思議な因縁という気がしないでもない。

この九年の間には、自分のもとより、世の中にもじつにさまざまな事があった。その間、好きな古典に近づいたり遠ざかったり、といっても、私の場合大半は王朝文学であったが、ともかくそういう関係をつづけているうちに、最近になってまたしても小刻みにではなく、古典については書きつぎたい衝動の強まっているのを制しかねていた。たまたま本誌から機会を与えられたのは

幸いだったと思う。私はよろこんでこの舟に乗る。ただし行方は自分にもわからない。思いつくまま、連想のままに、櫓を漕いで行くことになるのであろう。「古典日記」と題するゆえんである。

「白露も夢もこの世も幻もたとへていへば久しかりけり」という故人の詠がある。束の間の逢瀬にくらべれば、はかないもののたとえにされる露や夢、この世や幻でさえもまだ久しいという。この歌に即していうと、「言葉」もまさしくはかないものの列に加えられるべきであらう。しかしその思いがつのればつのほど、「言葉」を頼もうとする心、「言葉」にかけずにはいられなくなる心がつのるのをどう解けばよいのか。いまの自分には、九年前のような気負いはない。古典をすぐに役立てようという気持もない。ただ、自分を発言に駆り立てる衝動の根の、纏れ合いながらもより多くなってきたことだけは認められそうである。

『和泉式部集』に、

人は行き霧は籬に立ちどまりさも中空なかぞらにながめつるかな

という一首がある。この歌には、「九月ばかり暁かへりける人の許に」という詞書がついているが、帰ってゆく人に追いつがることが、残されてひとり臥す気持にもなれないまま、その目を中

空に預けている女の姿が、籬になおやすらっている霧に重なり、読者としてももの思わずにはいられなくなるような詠作である。女の目は、確かに暁の中空に注がれていたのであろう。去って行った人のおもかげを宙に辿るともなく辿る女の思いは、その男との来し方行く末にせわしくわたって定まらず、文字通り中空の状態にあつたのであろう。女の目と心とは、いみじくもこの中空状態において均衡を保っている。

その著『無常』において、『はかなし』といふ言葉がふくんでゐる王朝的な心理と情緒が、王朝末から中世にかけて、『無常』に急勾配で傾斜してゆく「跡を証された唐木順三氏が、その後『日本人の心の歴史』で、『万葉集』から『古今和歌集』への変化の一つを、「見る」から「思ふ」へ、と規定された記憶はまだ新しいが、この「見る」と「思う」との関係で言うなら、「さも中空にながめつるかな」というのは、「見る」と「思う」との中空状態における調和を示している。目が心を虐げているわけでもないし、心が目を貶めているわけでもない。

式部にはまた、次のような一首もある。

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り来んものならなくに

「中空」も「ながめ」もこの歌には用いられていない。しかしこの一首についての自分の読みは、こうして空の半ばをながめるともなくながめているからといって、思う人が天降ってくれるわけ

でもないのに、充たされたくて充たされない心の目の自然に空に漂うのをどうすることもできない、となり、すると、「人は行き……」における作者のありよう、この世へのつながり方と、さほど隔ってはいないように思われてくる。

虚空に人を呼び、人を求めるむなしさをよく承知していながら、それでもなおそうせずにはいられないというのは、一種の「無償の行為」であらう。しかもこの「見らるる」は、見ようとする意志と、自然に見るように仕向けられるという、意志を超えたものはたきとの相關関係において成り立つ行為であって、そうなる、この「見らるる」という状態そのものからしてすでに中空状態だとも言えそうである。

「ながめ」を王朝女性独特の「ボーズ」とする意見は少くない。ちなみに、「眺」(名)及び「眺む」(他動)の『大言海』における解は以下の通りである。

「眺」(一)ナガムルコト。ツクヅクト、見詰メテ居ルコト。(物思フトキナドニ) 悵望(二)見渡スコト。遠ク望ムコト。ミハラスコト。クニミ。又、眺望ノヨキコト。瞻望臨眺(三)見渡シタル趣。眺望。

「眺む」(「長見るノ転」)(一)ツクヅクト、久シク打守リテ見ル。見詰メテ居ル。(物思フトキナド)(二)遠ク見渡ス。遙ニ望ム。瞻望臨眺

『源氏物語』の中にも、じつに多くの「ながめ」の場が描かれている。次に引く空蟬のながめも、

自己矛盾にあぐねている女のどっちつかずの状態としては典型的な例かもしれない。

「女は、さこそ忘れ給ふをうれしきに思ひなせど、あやしく夢のやうなることを、心に離るる折なき頃にて、心解けたるいだに寝られずなむ、昼はながめ、夜は寢覚めがちなれば、春ならぬ木のめもいとなく嘆かしきに……」（空蟬）

この空蟬は、源氏が方違えに訪れた邸ではじめて逢った受領の妻で、源氏は、この女の思いがけない魅力に惹かれてしまう。侮れない女だと思う。老いた善良な夫をもつ空蟬としては、これ以上源氏との情事を重ねないよう、むしろ相手の心変りを願う分別もあるのに、折角のその分別も、夢のような一夜の妖しい思い出に碎かれて、安眠することもかなわず、夜は覚め昼はながめに暮されて……というのである。

頑なに相手を拒みながら、心底では相手の心変りを恐れるという自己矛盾は、受領の夫に対する自責はあっても、「心の中には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし。しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむと、心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る」（帚木）状態につながってゆく。

さきの和泉式部の歌にしても、この空蟬の場合にしても、女がひと所をじっと見つづけてものを思う、その思いは、揺れ動くもの、背き合うものの全体であり、しかも事柄を決して割り切ら

ないという点で通っているが、ながめという言葉のよく馴染んでいる歌といえ、小野小町のそれよりも先に式部の歌が思い出されるのは、自己矛盾の直視や分析の鋭さと、その感覚的統一において、式部は群を抜いている歌人だとみているせいかもしれない。「はかなしとまさしく見つる夢のよをおどろかて寝る我は人かは」といったような歌にも、式部のこの特性はよくあらわれている。

式部は、ながめを中空にみごとに重ね合わせた歌人である。しかし、ながめといえ、いつでも中空を見つめてもの思いにふける状態とは限らない。ふつうに物を眺めている場合もあれば、何とはなしに思い沈んでいるという場合もあり、それに「長雨」が掛けられる例も少くないのは知られる通りである。そうとは知りながら、それでもなお、「さも中空にながめつるかな」一首を、ながめの見本のように読むのは、多分、「ながめ」あるいは「ながむ」という中空状態に、単なる「ポーズ」や雰囲気以上のものを感じはじめているせいであろう。

万葉びとの朗らかな野性はすでに失い、そうかといって武力の時代の行動力にもまだよくは馴染んでいない王朝の女性を考えてみるのに、障子や几帳のかけで、時にはまた、簾をかかげ格子上げてひとり静かにもの思う姿は、他のどの時代の女性によりも似合わしくはみられるもの、目と心とを中空に重ねてながめ暮していたのは女だけではなかった手近な例としては、在原業平の次の一首をあげることができる。